天理教義

257
3

特18
951

天理

教義

明治
40 5 8
内交

天理教教義

目次

第一章　神……一
第二章　人……二七
第三章　信心……七一
第四章　報恩……九一

天理教教義

第一章　神

本章の御教は、神と世界との關係をお諭しくだされ、教祖は人間萬たすけの神として天下り給ひたるをお示しくだされたのである。

第一節　天理大神は此の世よろづいさいの元。

謹みて案ずるに、凡、物事一切其の原を知るといふことは極めて大切のことであるが、抑、此の世萬委細の大元は何であるか。近來學問が著しく進んで來て、あらゆる原因結果の理がわかり、其の世に及ぼしたる効能も少なからぬので、輕は

づみの者は、學問さへすれば何事もわかるだらうと考へて居る。從つて世界の本元も學問で知れる者と想ふであらう、併し之は一の迷である。學問は畢竟智慧の力で成り立つ者であるのに、世界の本元は到底智慧の屆く所でない、唯信仰の力で悟るより他に道のないものである。何故かといふに、智慧といふものは我が心と世界とを向き合せて置いてから、起る力であつて、其の働とする所、唯此と此とは同じであるが、此と彼とは異つて居ると云ふ事を見分けるだけに止まるものである。其れ故にどういふ理由で、心と世界とが向き合へば其の間に智慧といふものが成り立つのであるか、其の原が分らない。其れのみならず、心と世界とが向き合つた間には、

唯白い黑いを見分ける智慧といふ事ばかりが成り立つでなく、喜しいとか悲しいとかいふ感情といふものも成り立つが、之もやはり其の原が分らない。してみたならば、智慧といふものは心の眞相とか世界の眞相とかいふ事には立ち入ることが出來ぬのは明かであらう。然るに信仰といふものになると、此の處が大きに趣の異つたものになつて來る。世間の人、兎もすると、信仰などゝいへば道理にかまはず何か頑固に力を入れて居ることのやうに想ふが、其れは大いに違つて居る。先信仰の意味から言ふてみるならば、之は唯智慧一つの働でもなく、又感情一つの働でもない、所詮心全體を擧げて何といふことなしに心底から或る者に歸依する有樣をいふのであ

る。例へてみるならば、今一人の男があつて日夜或る大人物の側について居るとしやう、此の男が其の大人物の仕打を知るのは智慧の働に違ひない、又其の大人物の恩誼を喜しく念ふのは感情の働に違ひない、併し此の男が此の大人物に對して、自然唯何となしに慕しく念ひ、己も亦此の大人物の如き心になりたいやうになつて來て、果は遂に此の人の爲ならば命もいらぬといふ氣味が出て來る、之といふものは何うして智慧一つの働とも言へず、又感情一つの働とも言へない、我が心が心底から大人物の心に引きつけられて、我が心全體がとろとろに融けてしまひ、其の大人物の心が我が心に乘り移り、こちらの人物が其の大人物の中に歸入してしまつたの

で、こゝが即ち信仰である。此の故に信仰は力の込まる者であることは勿論であるが、決して智慧と衝突するものでもなく、道理と反對すべきものでもない、正しき信仰は明なる智慧と清らかなる感情とに伴なふべきものであつて、人間には此の上もなき尊いものと言はねばならぬ。且又信仰の高い低い弱い強いの差はあるにしても、全く信仰のないといふ人は一人もない筈である。かやうの理由であるのに、兎もすると我に信仰のあるのを何となく恥かしいことのやうに思ふ人のあるのは、誠に心得違のことゝ言はねばならぬ。信仰の性質は一と通り斯樣のものであるが、嚴重に言へば、是れ迄に述べて來た信仰といふのは、唯簡單に信とか愛とか言ふべき所

であつて、本式に使ふ信仰といふ語は、此の信とか愛とかいふ心の働きが、世界の本元を大神として其の神に向つて働く所につけた名である、信とか愛とかいふ心が漸次進んで高尚になると、終に神の信仰といふ所まで達するのである。だから眞實此の信仰が出來るといふことになると、最早大人物に自然と引き付けられるごころでなく、世界の本元人間の親である神に引き付けられるのであつて、我と天地とは一體であるといふ覺悟が出るやうになる、之を名づけて神人一體の位と云ふ。教祖の尊き御信仰は全く此の位に達し給ひたるのであつて、本節の御諭は此の御信仰其の儘を御言葉の上に御示し下されたるのである。御教に曰ふ、天理大神は萬委細の元

と。先づ前に記したる所にかへりて思案して見よ、我が心と世界との間に智慧が成り立ち、又喜しいとか悲しいとか云ふことの成り立つのは何ういふ理由であらうか。心と世界とが全く別々のものであつて、何等關係のないものであつたならば、かういふことの起る筈はない、此處はよく思案してみるより仕方のない所であるが、一寸考へて見ても、油紙に墨は付かず、猫に小判は何の感覺も起さゝぬではないか、してみたならば、二つの者の間に何か關係のつくのは何か一致する所の元がなくてはならぬ、かう考へると、心と世界との間には何うしても何方にも通じて居る元がなくてはならぬと信ずる。そこで世界といふやうな大きなものは兎も角、地球とい

ふものだけを考へて見ても、大昔と今日とでは大分樣子が違つて居つて、長い年月の間には著るしき進歩といふことが行はれて居る、極く古い頃には、今日の人間といふものもなく、又生物としても眞に簡單なる者であつた、此の事實は今日の研究で明らかになつて居る。さうしてみると、此の世界は唯あてもなく變りゆく世界でなくて、何か精神の籠つて居るものと信ぜられる。斯うなつて來ると、我が心もつまり此の大精神の現であり、又世界ありとあらゆるものにも此の大精神が籠つて居るものであつて、其れが爲め心と世界との關係も成り立つのであらうといふことを信ずるやうになる。殊に此の世界萬の物の組み立が如何にも巧妙なる所を考へ、且又我

々の眼には、一向自由のきかぬものと見ゆる石や金のやうなものも、學問の力で研べてみれば、皆一時も靜つて居らぬ活物であるといふことを考へてみると、益々此の世は此の大精神の現であるといふ信仰を確める。此處まで考を進めて來れば、どうでも斯うでも此の上の落は、此の大精神が萬物進歩の上に與へて居る一定の秩序是れ即ち天理であつて、此の大精神は此の天理の活きた持ち主として、其の智惠と力とで萬物人間を活かす大神でなければならぬといふ所に歸着する。さうしてみたならば、教祖が世界の本元を天理大神と仰せ下されたるは、如何にも尊き御諭として仰ぎ奉るべきではないか、我々數ならぬ心にも一旦此の信念に接しては、之を振り捨てや

うとしても捨てることは出來ぬ。併し我々凡人にしては、斯樣な理屈めかしい道行によりて、辛うじて天理大神の面影をうすうす仰ぐことが出來るといふ迄に止まるのであつて、未だ未だ天地と感合するとか、又は至誠天を動かすとかいふやうなことは思もよらぬ所である。然るに教祖の御心が世界に對したまひては、決して斯樣な廻り遠い念を浮べられたるのではない、宏大なる御信仰より、直に此の世界を以て天理大神の發現と觀られ、一も二もなく天地人一體の感を起させられたること、恰も我々が日光を見て直に其の日光たることを知り、理屈も何もなしに日光に温まり、日光の限ない色合を樂むが如であつたのである。言はゞ我々は襖一重を隔て、天

理大神を拜するより外仕方のないものであるのに、教祖は直々神を拜され、尙、神の御手によりて神の懷の中に御入り遊ばされたるやうなものである。此の故に我々にしては、此の如き信念を確と念ひ浮べる時だけは、一手を擧げ一足を動かすにも、唯に我一人の事でなく、天地の事であると信じて、自然に責任も重いやうな感じを生ずることもあるのであるが、常々さうであるといふわけには行かぬ、今斯う考へて居ても次の時にはもはや淺ましき凡人となつてしまふ、こゝが我々信念の如何にもたよりなく下劣なる所である。然るに教祖に於かれては、全く神に合一せられて悖ることなく、遂に神の命によりて萬たすけの神とならせ給ひ、此の尊き御教を我々

一れつ兄弟に布かれたるのである。斯様なわけであるから、本節の御諭は之が悟れたといふ位では未だよく分つたのではない、一心天地と感合するといふやうになつて、始めてよく覺れたのである。苟も本教の信徒たるものは能く信仰といふ事の旨意を覺り、益々高尚の所に到るやうに心懸けねばならぬ。

第二節　十柱の神は天理大神の分れ、萬の守護。

國常立尊は天にて月、人間身の内にとりては潤、世界にとりては水、すべて陰一切の司。

面足尊は天にて日、人間身の内にとりては溫み、世界にとりては火、すべて陽一切の司。

國狹土尊は人間身の内にとりて皮筋、すべて繋ぐ力一切の守護。

月讀尊は人間身の内にとりて骨、すべて突つ張る力一切の守護。

雲讀尊は人間身の内にとりては飲食出入、世界にとりては水氣上げ下げ、すべて變る力一切の守護。

惶根尊は人間身の内にとりては息ふき分け、理きゝ分け、世界にとりては風吹き分け、すべて撰り分けの力一切の守護。

大食天尊は人間身の内にこりては産の時親子身一つの縁きり、世界にこりては截れもの、すべて截る力一切の守護。

大戸野邊尊は人間身の内にこりては生れ育ち。世界にこりては鳥畜粒氣、すべて育つ力一切の守護。

伊弉諾尊は父親種子。

伊弉册尊は母親苗代。

人は萬物の靈長として神十柱よつて何不足なく守護する。

謹みて案ずるに、此の世は天理大神が先づ陰と陽との二靈に

現れ給ひたるが第一の始であつて、此の二靈が樣々に配合して、天地日月夫婦火水より、あらゆる生ある物生なき物に至るまで、數限りなく現はれ給ひたるのである。此の二靈が樣々に配合するのは、繋ぐ力、張る力、變る力、撰る力、截る力、育つ力の働に依るので、此の六の力も天理大神の現である。是の故に、萬物の元は陰陽、陰陽の大元は天理大神であつて、萬物は所詮同一体である。此の同一体の者が、今現に在るが如く、一一差別があつて樣々に現はれて居るのは、六の力の働である。此の六の力は何ういふやうに働いて居るかといふに、凡、如何なる物でも其の形と地位とを保つことが出來るのは、皆繋ぐ力と張る力との働に依り、萬物一時一刻

も其の儘に止つて居るといふことなく、瞬く間にも限りなき變化をして居るのは、變る力の働に依るのである。さうして此の變化といふことは唯あてもなく行はれて居るのでなく、萬物の變り行くには必ず一定の目的が具はつて居る、例へば水の低きに流れ風の暖きに走るが如きもので、殊に人間に就てみれば此のことは尤も明である、誰も何の目的もなく其の日其の日を過ごして居る者はない。之といふものは、萬物各大元の神より具へつけられたる分限といふものがあつて、何れも其の分限に應じたる事柄を目的として働いて居るのである、此は即ち撰る力の行はれて居る所である。併し茲に一つ注意して置かねばならぬのは、此の撰る力が生なき物には自

然に行はれ、生ある物殊に人間には自己の裁量といふことが付いて廻ることである。共に或目的に向つて働いて居るのは同じであるが、人間以外のものにありては、自然の成り行きに委せて置いて、少しも分限に違ふことはないのに、人間にありては此の裁量が加はる爲に、兎もすると分限に叶はぬことをするやうになる。之が爲め人事には善惡正邪などいふことが出來るのであつて、善は結局に於て榮へ、惡は結局に於て亡ぶるのみならず、一日怠れば一日丈の損となり、一刻勉れば一刻丈の得を生ずるのである。以上四の力の外に、截る力が行はれて、物が漸次に增し殖え、育つ力に依りて、生ある物には生命といふものが出來る。斯樣にして今日の此の結

構なる世界が出來立ち來りたるのである。

世界はかく神の造り給ふ所であるが、神は唯之を造られるといふばかりでなく、此の世界の萬物が滯りなく造られ、且又各其の分限によりて十分に働ける爲に、夫々の御守護を爲されて居る。是が即ち十柱の神の御守護である。御敎に十柱の神は天理大神の分れ萬の守護とあるは、此を御諭し下されたのであつて、十柱の神といふも天理大神に異つて居るのではない。

然らば人間は如何なる分限如何なる御守護を頂くかといふに、人は萬物の靈長として十柱の神總體に御守護下されて居るのである、世界萬物の中で此の上もなき分限と御守護とを頂い

て居るのである。是の故に人若し此に氣附かず、氣隨氣儘の裁量をして、其の日其の日を送るといふやうなことがあつては誠に畏れ多き限りと言はねばならぬ、一粒の米一滴の水たりとも結構に頂けるのは神の御守護である、目に見耳に聞き口に味ふことが出來るのも神の御守護である。何事も神の御守護なくては一も叶ふことなきをよくよく思案して、惡は小なりとも之を避け、善は小なりとも之を仕遂げ、一時一刻の間も之を惜みて己が本分を全くすることを勉めねばならぬ。

第三節　我は人間萬たすけの神、人間心いれかへ世のたてなほしの爲天下る、どうでも此の一すぢ道つけと

ほす。

謹みて案ずるに、世界は神の現なればこそ、其の進み行くに秩序があつて、天長く地久しきの間すこしも亂れたることなく、百くさの花咲き匂ひ、千里の月澄み亘るさまは兎もあれ、見るもの聞くものに自然の妙味具はりて、美しくも麗しくも感はれるのである。人は此の間に生れ、而も萬物の靈長として神十柱よつて十分に守護して下さる、之を想ふて見たならば誠に有り難き仕合せと言はねばならぬ。然るに世界なみ人間心には、此の大本の信仰がない爲に、一れつのこらず我利一點の肉となりはてゝしまひ、徒にはしなき望の遂げられぬ

を歎き、言ふて甲斐なき困難不自由に悲しみて居る、誠に淺ましき限りではないか。此の時に當り至大至愛の力現はれて、人を此の苦界より救ひ上ぐる事がないならば、此の世は更に季より季へと落ち行きて、復如何とも仕難いやうになるのである。是れ正しく神の思召に叶ふてでない、此の世に神あらば、如何で此淺ましきさまを餘所事にして見すごし給ふてがあらうや。是を以て教祖巾幗の御身にあらせながら、至大至愛の大御心より、萬たすけの大願を起させらるゝに至り、多年の信心積德、一朝神明に感合して、神人同體の境に進み給ひ、更に神命に依りて萬たすけの神となりて現れ給たるのである。我は萬たすけの神人間心いれかへ世の立て直しの爲天

下ると宣ひ、どうでも此の一すぢ道つけとほすと仰せ下さる所、御惠の深きこと、御決心の強きこと、御言葉の嚴なること一々言外に溢れて、誠に畏れ多きの極ではないか。

飜りて教祖の御道すがらを伺ひ奉るに、御神憑より御歸幽までは五十年の長き歳月である。此間、身を忘れ家を忘れ、裕なる資産をも抛て、盡く人を救るの資に充て給ひ、終には御手親ら糸を紡ぎ針をとりて、辛くも生計の道を立てられ數日の間食絶ち同樣の有樣に陷り給ふとも少なくなかつたのであつた。しかも迫らず屈せず何時も樂しげなる御氣色にて、世の不仕合せものに限りなき愛みを寄せられたのである。教祖は寛政十年四月十八日大和國山邊郡三味田村なる鄕士前川家に誕生あらせられ、御年十三歳にて、今の御地場なる同國同郡丹波市町三島の里の豪農中山家に嫁がれたのであつて、前川家中山家ともに近鄕にかくれなき名家であつた。だからして御幼少の頃は何一つ手剛き業をせられたのでもなく、一家の主婦となられても何不自由なき御身分である。然るに世の淺ましきさまを御覽じては御愛みの心默しがたく一旦大願を立て神命を受け給ふてよりは、前とは全く地を變へて世の穴も不仕合せなる有樣となられ、かよわき御身を以てあらゆる困難と戰はれることゝなつた。實に教祖の御一身は、唯愛と力との二のみが、此の淺ましき人の世に凝り固りたる御肉體であると見奉るより外はない。教祖はかゝる道をも御通り

下されて、一方には神にたよれば如何な道をも勇んで通れ、末々樂もしきものであるといふ天理を事實に現はして其の雛形を御示し下され、一方には不思議の神力を現はして、不思議のたすけを施こし下されたのである。御神憑は天保九年教祖四十一歳の御年十月二十三日より同月三十六日に至る四日の間に行なはれ、御歸幽は明治二十年正月二十六日教祖壽九十歳の御時であるが、此の間初十數年は畏れ多くも人々寧ろ狂人のやうに想ふ程であつたのに、御高德次第次第と遠近に聞え渡りて、御歸幽の時は凡百万の信徒が出來、現今に於ては已に三百万を超ゆるに到つて居る。我々今日に於て教祖の御肉身を拜むことは出來ぬが、御歸幽の當時、扉を開いて

世界を一列にふみならさうと仰せ下され、御靈は尙永く世界に止まりて、樣々の方便を以て我々一列を御救け下されて居るのである。幸にして一日も早く本教の信仰に入ることが出來たものは、皆此の神の御手誘であるから、信心怠りなくして尊き御救を頂き、天命を樂みて報恩の道を盡さねばならぬ。

第二章　人

本章の御教は、人と苦樂との關係をお諭しくだされ、末代の安心は信心によりて得らるゝものなることをお示しくだされたのである。

第一節

人間身は一代心は末代、身は神の貸物心一つが我もの、互立てあひ助けあひ勇みすゝむが天の心人の本道、道通る苦勞、通れる樂み之が眞の樂み、苦と念へば一代がたよりない、一代は二度と來ぬ一代萬物に靈長たるの一代これ通らせてもらうて樂む心末代と思案せにやならぬ。

謹みて案ずるに、本節の御教は、身上借物の理、心末代の理、及、人の本道をお諭し下され、苦の中と苦の後とには、末代の樂みあることをお示し下されたのである。

世をはかなむ者或は謂へらく、人間露の間の命、夢の世か、苦しみの世か、復となき英雄も終には鳥邊野の烟と消え去り、世に稀なる聖賢も生老病死の苦を免れぬ、人間何の爲に生れ何の爲に死するぞ、實に解し難きは人間の一代であると。斯樣に考へてみれば、此の世は誠にたよりなきものになる。併し此の考が果して正當のものであるか何うか。此の考を定めることは人間にとりて此の上もなき大切の事である。さりながら此の事は神の如何なる者であるかといふことを覺るのと

同じく、人間の限りある智慧ではとてもわからぬ、是も亦信仰の光を頂きて覺るより外に道がない。此の尊き光を頂くのは人によりて樣々の道行があるのであるが、次には試に智慧の上から手引をしてみやう。

先づ人は身體が主であるか、心が主であるか、何れかといふに、我と念ふ所は心にあるのであつてみれば、心が主であると言はねばならぬ。然らば我と心とは全く同じもので唯名稱が異ふだけであるのかといふに、此の二つは共に心ではあるけれども、我とは其の心が世界で働いて居る部分だけをいふので、此の我といふ心の奥には靈魂といふ心、即ち考へたり思案したり、喜んだり憂へなどする働の根本となつて、それ

等の働を總べ括つて支配してをる心が控えて居るのであつて、細かに言へば、心とは我と靈魂との二つを一つにまとめた名稱であると信ぜられる。此の靈魂といふは最早人間の智慧の届かぬ所であるが、兎も角も我が心の奥に控えて居るものであるといふことは、何うしても信ぜずには居れぬ。何故かと言ふに、我が働いて居らぬ場合にも何か我の奥に働いて居るものがある。一例を擧げてみるならば、今茲に死に近づいて居る一人の病人があるとしやう、今は虫の息ばかりであるので、誰が介抱しても更に受け應へがない、か、る時にも此の病人のごく親しい者が來て、聲を限りに其の名を呼べば、僅に眼を開き幽かに應へを聞くことがある、之は多くの人の知つて居る所であらう、此の場合に、此の病人の我は働いて居るであらうか、其の働いて居らぬことは、か、る病人であつて再び生き蘇つたことのあるものが、何の記憶もないので明かである。其の他非常の場合に平生我には思ひもよらぬ決心が出るとか、又天然の美しき風景に對して我知らず足を止めて見とれて居るとかいふときにも、皆我が働いて居らぬ。我が働いて居らぬならば、所詮我以上の靈魂が働いて、此のやうな擧動をさせたのであるとせねばなるまい、斯う考へてみたならば、人間の主は心、心の元は靈魂、靈魂が身體と結び付いて此の世で働く所が我といふ名稱のつく所であるといふべきである。而して尚一歩を進めて考へれば、此の世界の元

は神であるから靈魂の元も亦神でなければならぬ、且又神は末代のものであるから靈魂も亦末代のものでなければならぬといふことになる。此の考を譬にしてみたならば、神の心は大洋の水の如く、人の靈魂は入海の水の如きもので、本と分れとの別はあつても、心として又水としては、何れも同じものである。さうして心のはたらきといふのは、此の水が岸にあたつて、大濤小波をうつて居るのに比べたらばよいであらう。是が即ち御教に人間身は一代心は末代心一つが我ものとお諭し下された所である。してみたならば人間一代は何も露の命でもない、夢の世でもない、末代の中の道行である。さらば此の道行は苦一式のものであるか何うか、是を說く順

序として、先づ人間の本道と身上借物の理とを明かにしやう。人間我が心今日の常態は、此の世界に於て都合よく苦を避け樂みを需むる手段を見つけることにのみ忙はしい姿であつて、言はゞ苦樂の計算をする機械の樣なものになつて居る。だから我が心は始め靈魂が何んな考を以て世界に働きかけたかといふことは少しも分らないで、唯世界に働きかけてから後に驗した苦樂といふことに關係のあることばかりを知つて居る。斯樣の有樣であるから、人間の本道とは如何なるものであるかといふことを知るには、心の元たる靈魂に尋ねてみなければ確でない。然るに之が人間には出來ぬことであつて、人間の今日の姿を言はゞ丁度闇の中に玉を抱えて居るやうなもの

である、よく此の闇を破つて玉の光を見るのは、人間以上の人でなければならぬ。教祖の御神憑は此の闇でない光、即ち靈光を見て、天の心人の本道を覺り給ひたる機會であつたので、誠に人世にとりての一大事とあがめ奉らねばならぬのである。御教に曰く、互立て合ひ助け合ひ勇み進むが天の心人の本道と。かく伺ひ奉れば唯何となくさうなくてはならぬといふ感じが起つて來る、之は誰しも同じことであらう。是れ畢竟我々はかなき者ながらも、尙同じ尊き靈魂を頂いて居る所から、御教が自然と我々の靈魂に通じひゞくが爲である。此御教を篤と心に收めた上に、更に眼を天地の間に配つて思案してみよ。空に輝く日月、地に文なす山河より、禽獸草木に至

る迄、各其の分限とする所があつて活動して居らぬものなく、生氣天地に滿ち充ちて居る間に、萬物自ら相助け相侵さゞるの味が具つて居る。山に嘯く虎も、海に跳る鯨も、天地の助けなくては一日も其の生命をつなぎがたく、如何なる猛獸毒蛇も、天理をやぶりて其の害惡を逞くすることは出來ぬ。そこで之がのこらず一の神に基いて居るのであるといふことを想ふてみたならば、我々は此の萬物に對してすらも互立て合ひ助け合ひをせねばならぬと感ずるのである。してみたならば人間相互の間に於ては尙更の事ではないか。人々相信じ相愛し、各其の分に安んじて活動すること、誠に御教の如くであつたならば、天下の事何も憂ふべきものはないであらう。

已に説き明したるごとく、人は唯心一つが主であつて、其の本色は活動である。併し心が此の世界で活動するには、世界に交はる道具がなくてはならぬ、身體は其の道具である。此の道具は人自らが造つたものではない、神が造つて自然に心に結びつけ下されたものである。元來身體はとりつめて見れば、普通の物質と同じで自由のきかぬものであり、心は或る度合迄は自由のきくものであるから、此の二つの者は余程性質が異つて居るのに、神の力によりて一體に結びついた所から、心が其の自由の力で此の世界に交はることが出來るやうになつて居るのである。斯樣のわけであるから、身體は心に使はるべきもの、心は唯人間の本道によりて身體を使ふべきもの

である、若し道にかなはぬ使ひ方をしたならば必ず障りを見るやうになる。身上の病といふは皆此の使ひ方を誤るからであると言はねばならぬ。御敎に身上は神の貸物心一つが我ものとお諭し下されたのは此の事である。

次は人生苦か樂かの題であるが、先づ第一として考ふべきは、人間の本道に添はぬ苦樂である。此の如きものは樂みといふも終には苦みに變りゆくもの、又苦みといふも自業自得のものであつて、本心に立ちかへりて神の助けを頂くときは、之を除き去ることが出來るものであるから、之は二つとも此の題を解く爲には關係がない。これ等の苦樂に力を入れて、人生が苦であるとか樂であるとか想ふのは愚の至である。第二

に考ふべきは、人間の本道にも苦みのある者であるか、但しは樂みばかりの者であるかといふことである。已に述べたる如く、人は其の本分として勇み働かねばならぬもの、且又勇み働くには限りある身體によらねばならぬものであるから、其の勇み働く途中に苦を免れぬは當然の事であるとせねばならぬ。併しながら人は神の守護によりて如何なる道も通らせて頂くことが出來るのであつてみれば、如何なる苦勞も皆きりぬけられるものであつて、其のきりぬいて通れる所に樂みがあり、且又苦をきりぬけた後は樂みばかりでなければならぬ。してみたならば人の本道には苦を苦にすべきことは一つもない、之と戰つて征伐する所に樂みを味はつて行くべきで

ある。故に御教にも道通る苦勞通れる樂み之が眞の樂みとお諭し下されてある。まして重ねてお諭し下されたるごとく、人間一代は二度とこぬ一代万物に靈長たるの一代であつてみれば、誠に得難き結構なる一代であつて、我々人間に生れさして頂いたのは此の上もなき仕合せの事といはねばならぬ。殊に之が末代につゞく一代であると思案してみたならば、少しも此の世をはかなむ所はない。之が覺れぬのは畢竟信仰の光を見ることが出來ぬ所から出る迷である。

第二節　天の心は本世界の苦樂は末、本をはなれて末に迷ふが心のほこり、此のほこり八つ、ほしい、をし

い、にくい、かはい、うらみ、はらだち、慾に高慢、此の世一れつ見はらせどむれのわかりたものはないまう思案せにやならぬ。

謹みて案ずるに、本節の御教は八つの埃の理をお諭し下され、人は苦樂に迷ふべきものでないことをお示し下されたるのである。

先づ一つの譬へ話から述べやう。或る所に二人の兄弟があつたとする。父は二人を膝元に呼びよせて謂ふやう。此の海を越えて遙か向ふに一つの島がある、此の島は我が所有島であつて、萬の物一として具つて居らぬものはない、寶玉山に滿

ち、黄金地に溢れ、泉は甘くして魚肥え、地味饒にして桑繁りて居る、我此の地に比類なき美しの村落を建てやうと思ふ、汝等の同胞數百人今すでに此の地に行き、此の島の物萬に長として、判を拓き家を構へ、各其の能に從ひて業を分ち力を盡し、やがて我が望を實にせんとて勇んで居る、我今汝等二人をも此處につかはさう、同胞と共に互立て合ひ助け合ひ如何なる道も勇んで通れ、此の心さへ失はずば汝等の仕合せは疑ふ所ないとの談話であつた。そこで兄弟は悦ぶこと限りなく、大に父の恩を謝して此の島に行いた。此の時兄弟の心は父の恩を有難いと想ふ一念と、父の命に從ひ互立て合ひ助け合ひ如何なる道も勇んで通らうと想ふ一念との外何にもない。

先づ都合よき地を擇びて其處に住居ひ、農を以て身を立てやうと志して、雨の野邊、氷の路をも事ともせず、朝は星を頂いて出で、夜は月を踏で歸り、一心に稼いで居つた。すると其の中に島の樣子も段々に分つて來たので、樣々の計劃をも立て種々の仕事をも經驗してみるやうになり、從つて彼れは面白いが之はつらい、昨日は樂しかつたが今日は苦しかつたといふやうなことも話し合ふやうになつた。併し兄は初一念に心を固めて居る所から、島に來て覺えた苦しいとか樂しいとかいふことには決して頓着せぬ、すんだことは苦しかつたにもせよ樂しかつたにもせよ其れまでのことゝして氣にとめない、唯想ふ所は初一念互立て合ひ助け合ひ勇んで通るといふ

考だけであつて、日々に父の言ふた通りいくらかづゝも仕合せになつて來るのを結構の事と喜んで居つた。之にひきかへ弟の方はいやなことはわきへのけ、面白いとおもふことは何でもするといふやうになつて、終には父の言ひ付けも忘れてしまひ、全く快樂の奴隷とも言ふべき者になつてしまつた、斯うなると兄の異見も耳に入らず、人の言ふことなどは尙更といふ始末になつて、誰がするともなく島の厄介ものとして遠ざけられるやうになつた。歳經ること十余りにて、兄弟の所行が父の耳に聞え、兄弟諸共父の手元に呼び寄せられ、兄は大に父の喜びを頂いて再び此の島に渡り、今度は父の命に依りて島の司となるやうになつた。弟は痛く父の異見を受けて、

修業の爲とて別の樂み少ない土地にやられてしまつた。

此の話にて父といふを神にあて、島を世界にくらべて考へてみよ。兄弟の初一念は父の心より外に何にもない。樂み苦みは島に行きての後に始めて覺えたことである。是が即ち御敎に天の心は本世界の苦樂は末と諭し下されたる所である。弟は島に於て父の心は忘れてしまひ、全く苦を去り樂を需むることに溺れてしまつた。是が即ち御敎にて末に迷ふが心の埃とお諭し下されたる所である。かやうな埃り心で通らうとすれば、樂を需めて却つて苦に陷るやうになること、弟の成り行きに省ても明かである。まして人の心は末代のものにて、肉身死せば魂は神の元にかへること、恰も兄弟が父の手元に

呼び還されたと同樣である。さうして此の世にて埃り心でくらした者は、次の世には更に苦しい修業をせねばならぬ。故に人たるものは埃り心を出さずに、天の心一つで通らせて頂くといふ心懸誠に肝要なことである。御敎によく思案せねばならぬとのお諭し實に有り難きことではないか。

八つの埃は埃り心の主なるかどめをお諭し下されたのである。是れ盡く天の心を忘れ、世界の苦樂に迷ひ、横着をしても一時を樂に通らうとするところから起るのである。苦樂は後から見て天の心を味ふ道具であつて、前の方の目あてとして之に執着すべきものではない。天の心に從へば天然自然に樂みが來る、樂みを目あてとすれば却つて樂みが消えて苦みを買

ふやうになる。だから何うしても眞の樂みを得やうとするには埃り心を打ち拂はねばならぬ。さらば其の埃り心の八つとは何ういふものであるか。第一、**ホシイ、ヲシイ、**の埃はすべて形のあるとないとの區別なく自分の身體自分の名譽などを始めとして、一切の物に對して起るのであつて、天の心は忘れてしまひ、唯苦を去り樂みを需むるといふ心一点張で物に對する所から埃となるのである。例へてみるならば衣もの食ものがほしいといふのも、天の心で其の日其の日を通らせて貰ふためにほしいのでなければならぬ、それを立派だからほしい、甘いからほしいといふ心でするならばほこりである。此の埃り心から言ふならば、何んでも樂しくさへあれば宜い

といふことになるから、立派な衣ものを着て心を愉快にする爲には何んな手段もかまはぬ、甘い食物をたべて心を愉快にするならば後と先きの事は何うでも宜いといふやうに傾くので、却て少しの樂みの爲に大きな苦みに迫るやうになつてしまふ。埃のない本心の人ならば、此の愉快といふことを前途の目的にはしない。前きの方は天の心一つで通らせて頂かうと想ふばかりで、此の樂みとか苦みとかいふことは後から眺めて居る、あゝ今日結構に通らせて頂いたのは天の心に叶ふたからである、誠に有り難い、昨日は面白くないことがあつたが彼れは斯く斯くの事が天の心に叶はなかつたからである、此の後は分けても慎まねばならぬといふ考になつて居る。斯

かる人は段々に樂しいことが增して來るやうになるのであつて、樂みを宛にしないのに自然に樂になる。こゝが天理の尊い所である。又**ヲシイ**の埃でも同じである。身体は働く爲に神のお貸し下されたものであるのに、其れを忘れて身をしみをするといふのは、所詮苦をさけて樂を需むるといふ心だけになつてしまふのであるから埃になる。第二、**ニグイ、カワイ、ウラミ、ハラダチ**の埃は總て人に對して起るのであつて、是も重ねて說く迄もなく、本を離れて末に迷ふから埃となるのである。例へてみるならば、互立て合ひ助け合ひの本心から言うて此の世に惡むべき人は一人もない筈である、今茲に惡いことをした人があつたとしやう、其の場合には世間の諺

にもある通り惡い子は余計にかはいといふやうに、却つて氣の毒なものである憫なものであるといふ心が出なければならぬ、此の心から其の人をたすけたさ一ぱいになつて、其の罪を憎むといふ心はつのりて來るにしても、其の人を憎むといふ心は少しも出べき理由がない、然るに世間なみの心にては人を憎むといふことがある、其の心をとりつめてみれば皆自分に愉快を與へぬといふ所から憎むのであらう。世間なみの**カワイ**といふのも同じことで自分に愉快を與へる爲にかわいのである、さうでなければ人に分け隔てをするといふ筈はない。だから世間のかわい、にくい、は畢竟するに自分の快樂苦痛といふことから割り出して居ると言はねばならぬ、是が

埃である。**ウラム**といふことにしても、我身がはかなきものであるが爲兎もすれば埃のつきやすいのをうらんで、一心に足納の理を修むるといふことは正味のことであるが、人をうらむといふことは萬なき筈である。**ハラダチ**といふのも他人の仕打を苦にして其の苦に力こぶしを入れる所から起るのである。力こぶしを入れるなら苦樂の末に入れないで天の心の本に入れるが肝要である、末の事に頓着するのは誠に愚かなる心と言はねばならぬ、何の得もあることでない。第三、慾といふ埃は本を離れて苦樂の末に迷ふて來た心が、年月を重ぬる中に深く根が付いて、最早其の人の性分ともいふやうになつた有樣である。前の六つの埃は言はゞ其の時時の出來心ともいふやうなものであるが、此の慾といふ埃になれば中々おろそかにならぬ深き因緣の積つたのである。前生からの惡い因緣などは皆此の慾といふ埃になつて現はれる。世間でいふ惡い性分といふものは皆此の慾の中である。色慾、貪慾、强慾などは其の主なるものであるが、同じにくいかわいの心でも唯何となく人に分け隔てをするやうになり、自分で其の惡いことを知つても何うも之を直すことができぬやうになつたのは、最早慾となつたのである。だから此の慾から身上に障りて病氣となつたのなどは中々容易に癒らぬ、世界も慾の世界となつたならば最早季である。苟も此の世に生を受けたるもの、本心の光未だ消え失せぬならば、一日も早く己が慾を

拂ふに勤め、本心に復りて只管神にもたるゝの精神にならねばならぬ。第四、高慢といふ埃は人の大本たる神を全く忘れてしまつた所から、此の世を自分の力一つで通すといふ考を持つによりて起る埃である。抑少しく思慮あるものは考へねばならぬ、此の世は果して自分の力一つで通れる世であらうか、國家の厄介にもならねばなるまい、社會の厄介にもならねばなるまい、家族の厄介にもならねばなるまい、何事も自分の力一つで出來るといふ事は一つもない、してみたならば世間なみの心にて考へてみても、決して高慢といふことはしてならぬ事である。まして本心に立ちかへりてみるならば世界は皆神のもの、人は皆神の子であつて、我の今日あるも亦

神の惠である。しかのみならず人の力には限りのあるものであつて、自力一方では行く先々が安心出來ぬものであるのに神は之を助けて何不自由なく通らせて下さる。斯樣な次第であつて何處に高慢をする所があるか、唯只管神の御恩を謝し、同胞相助けて一心に神にもたるゝより外はないのである。御教には八つの埃が次の如くに諭し下されてある、朝夕よく思案さして頂くがよい。

ほしいといふても値を出してほしいは正味、値出さずに身にすきたるものをほしいと思ふがほこり。

をしみといふても物を大切にし、費を省くをしみは結構、出しをしみ身をしみがほこり。

我身かわい我子かわいゝ結構なれども、我と他人とのへだてがほこり。

にくいといふても當然のつみを惡むは正味、人をにくむがほこり。

又うらみ、人をうらむはほこり、我身うらんで足納するが正味。

はらだちに正味なし、立つても立たしてもほこり。

通常の欲は結構、強慾色慾貪慾がほこり。

高慢はおれがおれがといふ心、高慢に正味なし。

第三節　此の世にこわいものは我が心より外にない理

にせまるから難義不自由せにやならぬ、心の埃すきやかはらうてひたすら神にもたれつけ、誠一すぢの信心神がうけとるなら前生のわからぬ因縁までもきりすて、大難は小難小難は無難につれて通る。

謹みて案ずるに、本節の御教は信心と無難との關係をお示し下されたるのである。

人間一代は神の有り難き思召により、萬物の靈長として通らせて頂く一代なれは、此結構なる一代の中に難義不自由といふことのあるべき筈はない。然るに我にも他人にも病難災難を始め、樣々の難義不自由がまつはり來るのは何ういふわけであ

るか。御教にては心の埃が因縁であると諭下さる。解り易い例をいうて見たならば、身をしみ骨をしみが因縁となつて金錢衣食に不自由をする。金錢衣食に不自由をする所から値を出さずに他人の所有までもほしいといふ心の埃が出る。之が復因縁となつて人ならぬことをたくらむ。すると遂に我氣が咎め、他人の手前もおそろはづかしくなつて自然に氣が塞ぐ。其のうちに世間には蔑視まれる、上の法律には問はれさうになる、家内の者にはかなしまれるといふやうになる。さうなれば最早五尺の身體天地の間に容れどころなしといふ有樣になつて、重なる心痛が身上にせまり終ひ病難といふことになる。先づ一通かやうなものであるが、深く思案してみれば如何なる難義

不自由も埃り心が因縁となつて居らぬものはない。其はよくよく我と我が身に問いつめて覺らねばならぬことである。しかし御教には此の因縁に現代の因縁と前生の因縁との二つがあつて、前生の因縁は臆えて居れぬもの、深く根のついて居るものと諭し下されてある。だから輕々しく思案して我は惡い因縁など作つた覺はないなどゝ思ふてはならぬ。

さらば難義不自由は人間に免れ難きもの、自業自得のものであるから、止を得ざることゝして氣を悶えながらも諦めて通るより仕方がないであらうか、之は仕方がないと諦めてみても諦のつくことでない、さう諦めて平氣で通れる人は一人もない、若しあるとすれば其は人情を殺して居るのである。御

教には神が救けると仰せ下さる。さうしてみたならば諺にもいふ如く、困つたときの神だのみ、直向神の救を祈るより外はあるまい。

さらば埃り心の其の儘で、神に祈りさへすれば救が頂けるであらうか。御教には埃り心をすきやか拂ひ清めて天の心に立ちかへり、一心不乱に神にもたれつけば、其の人今までに如何なる心得違があるにもせよ、神は現在其の時の誠をおとり下されて、前生わからぬ因縁までも切つてすて、其の人の誠相應に、大難は小難、小難は無難につれて通ると仰せ下さる。誠に有り難き御恩の程感泣の外はないのである。

世界なみ人間心にても、少しく勇氣あるものは百折不撓の

精神をふるひおこして、困難に勝ち不自由を脱せんと企てるであらう。是れ健氣の事よみすべき仕打であつて、冥々の中に神の御德を頂くに違ひない。さりながら人の力には限りありて、とても打ち勝ち難き困難をかもすことがある。かゝる場合に自分の力のみにて困難に打ち勝たうとしても、すればするほど悶えに悶えて來て、更に困難に陷るやうになる。故に人間には何うあつても信心といふことが肝要である。一旦此の尊き御教をきゝて覺るところあるものは、一刻も早く疑ひ心を去りて信心專一と心懸けねばならぬ。

第四節　何事も神の意世界には何んな道も通らせてあ

る、萬足納の理を修めひたすら神にもたれつけ、誠一すぢの信心神にとゞくなら何んな道も勇んで通れる何んな願もかなふ時來る。

謹みて案ずるに、本節の御教は、足納の理をお諭し下され、信心と開運との關係をお示し下されたるのである。人には誰にも埃り心のないものはないが、我と我が身の考だけにては、天の心一つで通らせて貰ふて居る、心の埃は更にないと思ひ、又其の行も其れに近しい程の善人があるであらう。か、る善人の目にも、世の不平等ぬ有樣、貴賤貧富の懸隔、惡榮え善悶ぶる成り行きなどが映りては、遂に疑惑の念

を起し、如何に前生の因緣に相異あればとて、余りの顚倒と て怪むことがなきにかぎらぬ。若しさうとすれば是れ最早心の埃ほしいの一念が起りかけて居るのである。本心のものならば、如何なる道にあたり如何なる事に出會ふとも、唯人間と生れて此の道を通さして頂くのが有り難い、天の力を受けて此の事を甘く切りぬいて行くのが面白いと思ふ一念ばかりで、他人に對しては、信義を以て互に立てあひ愛情を以て互に助け合はうとする心より外に何にもない。他人が貴からうが賤しからうが己に於て何の考も起らぬ。まして惡人が榮えたからとて、其の眞似をしやうなど、は露ほども思はぬのである。一口に言うたならば、目の前に差しか、つた道を天の

心にて通さして頂くのが我が本分と心得、之に足納して居る。足納とは是で結構やと想ふ心であるが、唯不足心を持たぬといふ丈のことではない、自分差し向きの分限に叶はぬことは更に望まぬ、叶ふことは存分にして満足するといふ精神である。例へてみたならば今一斗桝だけの役目をすべきであるといふ時には、一斗以上の桝の働をしたいとは思はぬ、又一外桝五合桝位のことをしてずるけては居らぬ、之が一斗桝としての足納である。併しながら妄に富貴を羨み貧賤を卑しむ心即ちほしいの埃はつきやすいものであつて、やゝもすれば世の不平等をあやしむに至るが免かれがたき人情であり、且又金もいらず名譽もいらず命もいらず打てど叩けどいつかな動

かぬ鐵石心にて道を樂むといふことは、中々に人間心の及ばぬ所で、兎もすれば行く先々の心配が出るものである。是れ即ち本節のお諭ある所以である。御教の旨は、此の世あらゆる道すがらは皆神の思召によりて出來て居るのであるから、世間の目で見て如何に賤しい道すがらのやうに見えても、神は必要の事としてお定め下されて居るのである、神の目には高下はない、唯道すがらに樣々の差別があるだけである、何れもなくてならぬことゝしてお認め下さるのである、だから本心で通りさへすれば何んな道でも通れぬといふ道はない、故に足納の理を修め誠一すぢ心で神にもたれて通りさへすれば、如何にむつかしい道でも神は倍の力にてお助け下され、

必ず勇んで通れること疑なく、且又無理な願でない以上は、何んな願も受け取りて開運の時をあけて下さるとの仰である。誠に有り難き事安心の事ではないか。

世に病難又は災難に出合ひ、一旦大に悔悟して神のあらたかなる救を頂き、専心御道につきたる人々であつても、咽喉もと過ぐれは暑さを忘る、といふ類にて、何時となく御道に疎くなる者がある。其の原因は様々あることでもあらうが、多くは未だ本節のお諭が覺れぬからであると思はれる。よくよく思案して足納の理を修め、行く先々は安心して一意専心神にもたれ、開運成功の時至るを樂まねばならぬ。

本節は之を前節に對して見たならば、人間には無難を祈る爲ばかりでなく成功を期する爲にも、信心堅固でなければならぬことをお諭し下されたのである。

第五節　人間唯心一つ、末に迷へば一代にもせまる本にすがれば末代のびる、之が天理、よう思案せよ。

謹みて案ずるに、本節のお諭は第二章全體の要旨である、又本教の眼目である。

前にも説き明したる如く、人間心様々の迷を擧げてみたならば、第一に、此の身を我がものと想ふを迷とする。身は神よりの借物であつて、我が手ごみ勝手にするわけには行かぬ。第二には苦樂に執着するを迷とする。苦樂は後から味ふべきも

ので、前途の目的としてはならぬ。苦樂に執着して力こぶしを入れるを心の埃といふ。第三、此の世を苦の世と思ふ之が迷。凡そ苦にすべき苦は一つもない、皆切りぬけられる苦ばかりで、之を切りぬける處又きりぬけた後に樂がある。第四、人間一代と想ふ之も迷。此の一代は萬物の靈長として通らせて頂く結構なる一代であつて、所詮末代までの中にある一の道行といはねばならぬ。第五、信心いらぬと想はゞ之も迷。自分の力には限があるからまさかの時の役にたゝぬ。信心は限りなき神の力を頂くすぢ道であつて、信心神にとゞけば何んな道にも難義不自由なく、開運成功も疑ない。茲に始めて安心といふことが成り立つ。第六、たゞ祈願祈禱だけすれば

よいと思はゞ之も迷である。何んな道にも足納して、埃り心をすきやか拂ひ、天の心一つになつての上の信心でなければならぬ。足納は何んな道を通らせて頂くのも神の御恩と想ふ一念さへ出れば修まること、又埃り心を拂ふといふのも決して苦樂を感ぜぬやうになれといふのではない、苦樂のあとに執着するなといふだけの事であるから、何れも自分の力の及ばぬことではない、丹精さへすれば出來ることである。さて此の六つの迷がはれたとせよ。人間我がものは心一つより外にない、互立て合ひ助け合ひ何んな道も勇んで通さして頂かう、神にもたれて居つたならば末々何の心配もいらぬといふ大決心大安心が出て來る。之が人間眞實の立ち場であつて、

末代のびる道である。然るに人間兎もすれば、慾は人の自然にもつて居るもので、苦を避け樂みを求むるは慾の性質である、之を矯め直せといふても畢竟出來ることでないと想ふ者もあらう。併し此をよく思案してみなければならぬ。苦樂を感ずるといふことは人間自然の性質に相違ないが、之に執着するのは決して至當のことではない。苦み樂みは何れも過ぎ去つて仕舞つた事柄について感ずるので、濟んだ事は最早彼れ是れする要がない、苦しかつたからとて樂しかつたからとて最早それまでのことである、後から眺めて笑つて居るより仕方がない。前途の方は互立て合ひ助け合ひ何んな道も勇んで通らうとする一念さへあればそれでよいので、何も過ぎ去

つた苦樂に未練を殘して居ることはない。之に執着するから慾といふ埃を生みだす。してみたならば慾はけして自然のものとは言へぬ、人間の迷ひ心勝手心から作つた習慣である。樂は言はゞ泉の水のやうなもので、之を追へば自然に向ふへ流れ去つてしまふ、本に力を入れゝば自然に湧き出す。此に氣が附かずに埃り心で通らうとすれば、樂みを求めて却て苦に陷ること、本章第二節にも精々說き明した通りである。さうしてみたならば如何にも人間は唯心一つの者で、末に迷へば一代にもせまらねばならぬ、本にすがれば末代ものびるといふことが、よく覺れるであらう。是を覺りて信心の道に入るのが本章に於て尤も肝要とする點である。

天理とは之を廣く言はゞ神が萬物支配の上に現はされたる總ての秩序をいふので、今日學問の上で研べた一切の道理などをも含みて居る。併しながら本教は此等の道理總てを教ふるのではない。本教に於て天理といふは人生にとりて尤も大切なる道理をいふ。此の道理にも其れ其れ數多くあることであるが、其の約まる所をいはゞ人間唯心一つ末に迷へば一代にもせまる本にすがれば末代のびるといふの理である。其の故に御教にも之が天理と仰せられたるのであつて、本教を天理教と仰せられたるも實に之が爲である。

第三章　信心

本章の御教は、信心と靈教との關係をお諭し下され、誠は信心の精髓なることをお示し下されたるのである。

第一節　迷ひ心には信心も出來やうまい、されどよう思案してみよ、心得違ひの道があるから。

謹みて案ずるに、本節の御教は信心のお手誘である。

夫れ人に信心の必要なるは尚魚の水に於けるが如く、一時一刻もなくてならぬ者である。然るに魚は水の中にありて水の尊きを知らず、唯餌を求食るに忙はしく、人は常に神の御光を被りながら信心の道に入ることが出來ずに、生涯苦樂の羈

にか、つて居る。誠に悲むべきの至ではないか。

今日博識と言はれ、富者と難さる、人の中には、信心といふことを迷と見做し無用のこと、思ふ者もなきに限らぬが、暫く意を靜めて思案してみよ。智識も財寶も後々の未來に之を使用することが出來るから尊いのではないか。若しも未來といふものが、翌日ありと思ふ心の仇櫻ともいふが如く、全く宛にならぬものであつたならば、寶財も智識も何の役に立たう。此の未來といふことは、未だ誰も經驗したことのないに拘はらず、尙今も後も未來永々劫も、水は低きに流れ火は枯れたるを燥き、密は甘く花は薫はしくして違ふことなきを疑はぬは、是れ所詮信ではないか。此の一事を以てみても人に信

といふことのなくてならぬは明かである。人は皆信にたよりて居りながら少しも氣が附かぬまでのことである。神信心といふも是とは唯大小の違があるだけで別に怪しむべきことではない。試に想へ。萬有に齊一の規則が行はれて居ると思ふは所詮信であらう、何事も原因結果の連鎖に過ぎぬと思ふも信であらう、此の世に進歩といふことが行はれて居ると思ふも信であらう、さうしてみたならば今日學者智者といはる、人は皆識らず識らず信の上に立つて居るのである。今更に一歩を進めて何故に此の世には齊一の規則、因果の關係、乃至進歩といふことの行はるゝかを考ふるとせよ。已に第一章第一節に說きたるが如く、如何にしても此の世は天理大神の發

現であると信ぜずには置けぬ。是が迷信であるか、抑亦之を信ぜぬ人が迷信であるか。世の人天理大神を信ずることの出來ぬは、自ら信の道に一歩を踏み出して居りながら、未だ其の極点に達せぬものと言はねばならぬ。飜つて想ひみよ。人には自然に偉人を戀ひ、天地の美を慕ふ心のあるは何の爲であるか。單に之を戀ひ之を慕ふといふのみならず、眞に之を戀ひ之を慕ふ人は、身を殺して省みず利害を抛ちて問はぬことのあるのは、古來東西の歴史に例多きことであるが、是は何故であるか、之が迷であるとしても尚我々は此の迷へる人に自ら尊敬の心を捧げて居るではないか、之は何ういふものであるか。是れ皆我が心に具はれる私なき愛の現であつて、

其の起りをたゞせば遂に神を戀ひ神を慕ふことに歸着せねばならぬことも、既に第一章第一節中に説き明したる如くである。かくの如く人には智識の界を超へ利害の感を離れたる所に、是非とも神を認めて之を信じ、之を慕ひ、之にもたれねばならぬ自然の道すぢが具はつて居る。此の道すぢを辿ることは即ち信心である。してみたならば信心は迷ひ所でなく人にとりて尤も大切の事とせねばならぬ。神信心の出來ぬものこそ其の心が幼稚であるか、又は迷つて居るといふべきである。其の如何なる邊に迷つて居るかといふことは、第二章の御教によりて篤と思案してみたならば自ら悟るところがあるであらう。

第二節　心得違ひの懺悔は信心の始。

謹みて案ずるに、人もろもろの過あり自ら悔いて速かに其の心を改めずば、罪來りて身に赴くこと、一滴一滴の水も遂には大海の深きを成すに至るが如く、自ら解りて改めなば、一切の罪悪を去ること、百年の垢衣も一日に於て瀚ひ淨むべきが如くである。されば人たるものは一日も早く己が心得違に氣付き之を悔い改むること、さながら千斤の鎚をふるつて瓦を碎くの勢がなくてはならぬ。世には懺悔と稱して口先きばかり立派な文句を并べたて、さも殊勝氣に空涙をこぼすものもあるが、此の如きは懺悔にあらで僞善である。苟も懺悔と

いふからには、己が心得違を慚づるの心胸に滿ち、張り裂けむばかりの思がなくてはならぬ。人誰も己の心を知るものがないから平氣に濟まし込んで居るのであるが、若しも他人に一々我が心が知れるものであつたならば、實に二度と顏を合せることが出來ぬことばかりである。己は僞善者であるのに、若し陽に人より僞善者と呼ばれるときは、胸に釘を打たれなからも憤然として怒り、己は左程の價値のないものであるのに、人から褒られるときは御上手を使はれるとは知りながらも氣持が惡くない。人には親切と看せて內實は自利を貪り、正直ものと觀れば何所までも虛假にする。是れ實に今の世の常態であるが、何としても淺ましき限りではないか。而も是

れ他人事ではない、何人もよくよく我が心に省みるがよい。心中熟々と思ひ回せば、起ても居ても居られぬ慚愧至極の事ではないか。堂々たる人と生れて、斯く淺間しくも此の世を通らねばならぬ程無力の者であるかと思うてみれば、誠に殘念至極の事ではないか。一念茲に至れば、眞實の懺悔が自然に五臟六腑の奥から湧き出して來る。かく眞實に懺悔するでなければ決して眞實の信心は出來ぬ、眞實切なる懺悔は眞實熱心なる信心である。

しかし御教にも心得違は出でなほしやと仰せられたる如く、懺悔といふことは唯々己が心得違ひ迷ひ心を振り棄てゝ人の本道にかへるをいふのであるから、是れだけで信心が盡せるのではない。信心といふことは凹める地に山を築くが如く、先づ懺悔によりて地を平かに爲し、更に神にもたれて土を盛り立てねばならぬ。御教に懺悔を信心の始めと諭されたるは此の御意である。この故に人は常々懺悔に意を用ゐると共に、益々進んで信心堅固の所に至らねばならぬ。

第三節　身上惱みの懺悔は惱むところで思案せよ、人の目を暗ませば我が目が暗む、人の言ふことをきかずば我が耳きこえぬ、人に口あかせずば我が口あけぬ、胸の惡いことしたらば胸の病、腹の惡いことしたらば腹の病、指ざししたら手の病、尻にしいたら下の病、蹈

つけにしたら足の病、いやがることすればいやがられる病、人の動けないことすれば我が身が動けなくなる

謹みて案ずるに、信心は心直しが本であるから、我が心さへ天の心にもたれて居つたならば、何の惱み不自由もなく、何の心配もなき筈であるのに、何時しか埃り心を起して神に離れる所から、心の惱み身の惱みを求むるやうになる。是は屢々説き明したる所で、今更之を繰り返すこともない。だから人は常々信心を勵みて先づ惱みの原因を造らぬ樣にせねばならぬ。併しながら誰しも己が過には氣の附かぬものであり、且前生の因緣などは臆えて居らぬから、遂ひ知らず識らずの

間に病難などに懸ることが生じて來る。此の場合には最早仕方がない、唯々其の原因を思案して己が罪過を神に懺悔し、本心に立ちかへりて神の救けを仰がねばならぬ。本節の御諭は此の理をお諭し下されたるのである。

第四節　瞬くひまにも神を念じ、起き伏しにも神恩を謝し、及ばぬを覺りて願をかくる、これが信心。

謹みて案ずるに、信心とはまことの心とも讀みて、何の疑もなく何の懸念もなく、一すぢ心にて神にもたれつく樣をいふので、此の心の趣に三つの次第がある。之に名を付けて一には祈念、二には感謝、三には祈願といふ。

祈念とは神德を念ずることにて、天理大神を念じては萬委細の元となり給ふを想ひ、渡る雁が根、落つる瀧つ瀬を見ても、天の心の具はるを慕ふ、十柱の神を念じては萬守護の司となり給ふを想ひ、人は萬物の靈長として有り難き御守護を頂くを念ず、教祖を念じては萬たすけの神となり給ふを念ひ、御一代御道すがらの功德を念ひ、此の神の御救によりて末代の命、限りなき安樂を受くるを念ふ。かくして人間唯心一つ、互立て合ひ助け合ひ勇み進むが天の心人の本道、何事も神にもたれて通さして頂くならば、末々何の心配もないといふ所に一心を固める。之が即ち祈念である。

感謝とは神恩のかたじけなきを謝するをいふ。此の世に生れ

たるも神の恩、其の日其の日を結構に通らせて頂くも神の恩、末々の安心が出來るのも神の恩、難義不自由の救も神の恩、開運成功の救も神の恩、何一つ神の御恩を受けて居らぬ事なきを思へば、神恩の程誠に有り難きこと畏れ多きこと、感謝せねばならぬ。

祈願とは神功を希ふことにて、我々本教の信徒たる者は、教祖萬たすけの神の御神德にすがり、其の限りなき御力により て、我が力の及ばぬ所にも不思議の神功を頂くことが出來るのである。併し今更言ふまでもない事ながら、唯々他神に祈願さへ籠むれば、何事も叶はせて頂けるものと思はゞ心得違ひである。常々祈念感謝の信心怠りなく、天の心一つになりて、

我が力の及ぶだけの事を盡したる上、我が力の届かぬ所に、神の救け、神の力を願はねばならぬ。

教祖は絶大の御德に依り、直に天理大神に感合せられ、全く神と一體になり給ひ、天地の心を以て我が心となし我が行を以て天地の行となし給ふ所に進まれ、終には神命に依りて萬救けの神として此の世に現はれ給ふに至りたるのである。故に教祖の御信心は唯天神に對する祈念感謝祈願より外にないのであつたが、我々信徒は天神の外に尙此の萬救けの神を頂いて居るのであるから、唯に天神に對して祈念し感謝するのみならず、教祖萬たすけの神の御德を念じ御恩を謝し、殊に祈願は只管此の神の御力にすがらねばならぬ。此の神の御救け

が即ち天理大神の御救けである。

第五節　誠一つは天の理、すぐと受けとりすぐとかへす。

謹みて案ずるに、誠は信心の眞髓であつて、委しく言へば、心と言語との間、心と行との間は言ふに及ばず、心の中までが天の心一すぢになつて、他の事は念ひもせず言もせず行ひもせぬ有樣をいふ。埃り心、疑ひ心、虚僞詐術などは、皆二た心を持つから起るので、誠一すぢ心とは言へぬ。世の中には、先づ誠一つを籠めて信心だけしてみやう、行の方は後廻しでよいといふやうに思ふものもあるであらうが、是は大き

な心得違である。眞實誠一つの信心といふからには、心の中から行の末までを天の心一つに固めて居るでなければならぬ、行は後廻しにしやうと思ふやうでは未だ二た心があるのである。

誠一すぢの信心を神が受取り下されたならば、如何なる御救け御德を授け給ふかといふに、之は第二章の第三節と第四節とに記したる如く、何んな道も勇んで通れるやう、何んな願も叶ふやう、難義不自由は次してさせぬやう、一口に言へば末代陽氣に安心して樂しく通れるやうにして下さる。之れ畢竟信心の力に依りて神の靈光を頂き、此の靈光我が心魂に充ち滿ちて、一切の禍害を斥け、一切の善功を進め給ふに依る

のである。即ち神は外界から御手を伸ばして御救け下さるのではない、自然知らず識らずの中に心の中に入り込み給ひ不思議の御力を現はし下さるのである。例へてみたならば、今一大難事といふ時にいきなり信心して、自らは手を束ね徒に他人の來りて助力するを賴みにしたとて何の甲斐もない。信心堅固の人ならば一心に神にもたれ、自ら進んで此の大難事をきりぬけやうとする。茲に始めて神が現はれて我に不思議の力が加はり、其の上に他人の助力も自然に出て來て、遂に無難となるのである。併し茲に一つの心得がある。自ら進んできりぬかねばならぬと言ふたとて見當違の進み方はならぬ例へば病氣の如き、身上は神の貸しものであるから自分の勝

手にならぬもの、何程あせつても自分で病氣をつかみ出すわけには行かぬ、病氣といふものは所詮埃り心から出たものであるから、此の時我が心の進み方は、埃り心をすつきり拂ひ、天の心一つになるといふ事に進まねばならぬ。さうして身上はころつと神にさゝげて、神の爲し給ふまゝに委せるのである。醫藥が此の世にあるのも所詮神の思召に基いてをるので、病氣の時に之を用ゐるのは肝要のことであるが、此の服藥をするにも、自分で此の藥を服んで病氣を癒さうといふ考を持つてはならぬ、何處までも身上は神よりの借物で我が勝手にならぬもの、病氣は神の救けを頂くより外はない、我は一心に埃り心を清めやうといふ道に進んで、醫藥も畢竟神のたま

もの我にとりては心直しの道具であると思ふやうにせねばならぬ。病氣救けの御授けも之と同樣の心で頂くべきである。御授けをさせて頂く者は、素より一心不亂に病氣救けの祈願をこめねばならぬが、御救けを頂く者は、眞實己が心を懺悔して、唯々一心に神にもたれさへすればよい。我身にかへても救けたいと思ふ心と、是れまでは心得違をして居つて誠に申しわけがないと眞實に懺悔する心との二つが揃つて、誠一すぢの信心が神に届くならば、醫藥も必ず其の效を奏し、病氣も遂に本服に到るに違ひないのである。

然らば誠一すぢの信心は何時神が受取り下され、何時靈救を賜はるのであるかといふに、直ぐと受取り直ぐと返して下さ

る。所詮信心と靈救とは同時に行はれるのである。唯誠にも自然淺い深いの差があるから、一分の誠あるものには一分の靈救を下され、一尺の誠あるものには一尺の靈救を賜はるのである。故に誠を盡して倦まず怠らず信心するならば限りなき靈福を頂く事が出來る。かく神は至りて愛み深く至り紅公にましますが故に誠相應の靈救を賜はること必定誤りなきのであるのに、兎もすると神の御働きが少ないなどゝ言ふ者を見ぬに限らぬが、斯かる人は甚だしき心得違と言はねばならぬ。神の御働きが少いのは所詮我が誠の足らぬのである、信心が足らぬのである。神は決して時と處とに依りて御働きを異にするといふ樣な事は毫もなさらぬ。

第四章　報恩

本章の御教は、報恩と處世との關係をお諭し下され、人道は、親孝心、夫婦和合、互立て合ひ助け合ひ、家業大切、日の寄進の五つに歸することをお示し下されたるのである。

第一節　信心のもの此の世の御恩報じは親に孝心家業大切之が第一、一れつ互立て合ひ助け合ひ、中々には夫婦そろうて日の寄進、五つ一つが天の理ご諭し置かう。

謹みて案ずるに、人間此の世に生れ萬物の靈長として通らせて頂くのも神の御恩である。限りある我が力をお救け下されて

何んな道も安心して通らせて頂く事が出來るのも神の御恩である。さうして人間我といふも唯心一つで、其の心の通る道は互立て合ひ助け合ひ何んな道も勇んで進むといふが神の御指圖人間の本分である。してみたならば我々が我儘勝手心で世の埃に暗まされて居るのは何とも申し譯ない限りであつて、我々は何所までも神の御指圖に從ひ人間の本分を盡さねばならねことは更めて繰り返すまでもなく、此の本分を盡すといふことは畢竟神への恩報じであると念はねばならぬ。神恩忝けない有り難いと念ふ一念より此の本分を盡すのでなくば眞實に本分を盡したものではない。餘の心が雜るならば未だ誠一すぢの信心が出來て居らぬもの、何處かに埃り心がついて居るものと言はねばならぬ。眞實に信心堅固の人は神恩を念ひて本分を盡し本分を盡して神恩を謝するの外には何事も思ふて居らぬ。本節の御教は此の理をお諭し下され、更に進んで人間の本分を分ちて五の道をお示し下されたるのである。是れ即ち此の世を通る道であり、又神恩に報ずるの道であつて、人道といふことの正味は此につゞまつて居る。本教には之を勤め一條といふのであるが、勤めと言うても否々ながら唯勤めねばならぬと思ふ心で勤めるのでは信心が出來て居るのではない、眞實有り難いと思ふ一心から自然に勤まるのでなくてはならぬ。

以上說く如く五つの人道といふも之を約めてみれば、神恩忝

ぼなしと念ふ一念より互立て合ひ助け合ひ何んな道も勇み進むといふ本分を盡すことになるのであるが、此の五つの道を少しく細かに開いたならば何ういふことになるか。說き明しの都合により親孝心、夫婦和合、互立て合ひ助け合ひ、家業大切、日の寄進の順を取りて、次に一々之を述べやう

第一　親孝心

親には三つの親がある。一には國の親、二には教の親、三には生の親と云ふ。共に神の思召に依りて此の世に現はれ給ひ、其の厚き慈愛を以て此の國と我が身とを今日あるが如くになし給ひたるのである。此の世にては御恩の深きこと此の三親に過ぐるものはない。此の故に三親に事ひては何を置きても

其の御心を安んじ、其の御恩を報じ奉らねばならぬ。之れ聽て神恩に報ずることになるのである。

國の親　國とは唯に土地ばかりを言ふでもなく又人ばかりを言ふでもない。定まりある土地に多くの人々が住まひ政治といふ力で一の團體が出來て居るのを云ふ。此の政治といふ力は所詮強ひつけても善いことはさせ惡いことはさせぬといふことまでに立ち入るものであつて、今日の如く人々埃り心に迷ひて居る際に於て、我が生命財産を安全に保ち、且國中全體の幸福を進めるには、是非共此の力にたよらねばならぬ。此の政治の力を司り給ふが即ち國の親である。してみたならば國の親に對して其の御恩を報し奉らねばならぬは言ふ迄もない

ことである。

殊に我が日本帝國に於ては、天神の直裔にまします萬世一系の天皇上に統治し給ひ、春の如き御仁愛、霜の如き御稜威、并び行はせられて既に幾千年の久しきに及び、我等先祖も世々忠勇義烈の誠を以て皇室に事へ奉りて、遂に萬國に比類なき國體を固めなしたのである。此の故に我々臣民たるものは、格別にも祖先の遺風を負ひ、君恩の渥に感じ、奮つて國家の爲に盡さねばならぬことになつて居る。此の心發しては朝日に勾ふ山櫻となり、凝つては富士千秋の雪となりて、子々孫々未だ曾て變ることなきもの、實に我が國民の美風である。

教の親　教とは天理人道を說き、人をして心の中らから之に

從ふの念慮を起さすことにて、政治は外部より其の力を及ぼし、教は內部より人を誘き、二つとも相須つて此の世に大なる効能を現すのである。教には世界并の教と御道の教との二つがある。世界并の教も素より大切の事であるが、御道の教は人間の礎を立てるのであるから、尙更重んじなければならぬ。教の祖とは是等の教を司どる人々をいふので、教祖は神であらせらるゝから茲にいふ教の親の中でない、茲にいふのは主として教會の先覺碩德の方々をいふ。是等の方々は皆教祖に代りて我々信徒を導き、尊き救けを頂かせて下さるので あるから、我々信徒たるものは能く其の教を守り報恩の道を盡さねばならぬこと勿論である。

生の親　父母の恩深きことは殊更に言ふまでもない。胎内を出てから西東をも辨へぬ者をはぐくみ育て下されたる爲に、我々今日の結構もみられるのである。だからして世の敎にも父母の影すら踏みてはならぬとまで言ふてある。此の心を推し進めて先祖代々にも孝心をさゝげねばならぬ。

第二　夫婦和合

夫婦は二身一體の結び合であつて、一家の基、人生活動の本である。婦は内を整ひ、夫は外に勤め、共に慰め共に勵まし、固く和合して事に當ること世に所謂る水も洩さぬ中といふが如くでなければならぬ。紅の顏は哀ひ易く、心の愛は末代のものであつてみれば、夫婦の取り結びは分けても血氣にはやるを忌むべきである。

第三　互立て合ひ助け合ひ

互立て合ひとは人々各其の分限を守りて侵すことなく、互に義理を立て信用を重んずるを云ひ、互助け合ひとは人々各其の力を惜まず互に自利を後にして親切を盡すを云ふ。埃り心には信用を捨てゝも自己の利益を計り、又僅かの親切だに盡せば之を恩にかけて先方よりは幾層倍もの親切を求めやうとして居る。之れ甚だしき心得違と言はねばならぬ。互立て合ひ助け合ひは決して利害を考へてすることでない。全く神恩を感じ人道を樂む所から自然に出る道である。且又世の敎には互立て合ひの心を說きて、己の欲せざる所之を人に施すこと

勿れと云ひ、互助け合ひの道を説きて、己の欲する所之を人に施せと云ふ。御教にては之を施し又施さゞるは、我が之を欲し又欲せざるが爲でない。之を欲し之を欲せざるも、又之を施し之を施さゞるも、唯々天の心一つから出なければならぬ。信心之に到るには、我が心の奥に神より與へ下されて居る信と愛との二つに十分の養をするが肝要である。それには先づ第一に我と人との間に分け隔てをすることから癈さねばならぬ。此の隔て心は際限のないものであつて、我が隔てるから人も隔てる、人が隔てるから我は尙隔てるといふやうになり、遂には家を出づれば七人の敵ありといふが如き用心をせねばならぬことになりゆく。併し諺にも言ふが如く世の中に決して鬼はない、他人が鬼になるのも畢竟此方の仕向けが悪いからである。互々人情の通じ合ひは余程妙なものであつて、此方が五分憶へば對手の方でも五分憶うて居る。だからして、斷然始めから隔て心を打ち捨てゝ、一点の包み隱しなく我が心を明けざらしにして、自分に災難あるときは遠慮なく他人の助けを求め、其の代りに他人に災難あるときは自分の災難の如く心得て命に掛けても之を救ふ氣になるやうにすれば、自然に我と人との心が融け合つて來て、相互に他人の利害を自分の利害と思ひ、思はず知らず共に喜び共に憂ふるやうになる。かうならなくては決して信と愛との妙味を知ることは出來ぬ。

第四　家業大切

互立て合ひ助け合ひは一れつ兄弟に相對する時に現はるゝ心であるが、我一人又は夫婦一體にては如何なる心で其の日其の日を通らねばならぬか。先づ第一に家業大切と心懸けねばならぬ。茲に家業大切といふは極く廣い意味であるので、別に言へば我が身分器量に應じ何なりと勢一杯に働くことをいふのである。神は世界の進歩を以て其の心とせらるゝのであつてみれば、人は生活の進歩といふことを以て其の心とせねばならぬ。そこで多數の人々の間には、互立て合ひ助け合ひの心から、自然に社會といふ團體が成り立ち、其の力で全體の者の進歩を計るやうになる。今日の人は皆或る社會に組み

合うて居る者ばかりであつて、教育も此の社會から受け、職業も此の社會から取り、職務も此の社會から授かる。是れ皆其の人々の分限又は家業となるべきものである。だからして勢一杯に働くと言うても、此の社會の進歩といふことを目的として居る家業に力を盡すのでなければならぬ。かゝる意味の家業ならば、何んな家業でも結構に通れぬことはない。其處には必ず神の御救けといふものがあるから、行く先々決して何の心配も要らぬ。故に先づ青年であつたならば傍目もふらず一心に學問を勵み修養に勤め、壯年の者であつたならば農工商の職業なり藝術なり公務なり各其分限についた事を十分に働き、老年の者にしても其の日其の日を徒に過ごさぬ樣に

せねばならぬ。是が即ち家業を大切にするのである。

第五　日の寄進

家業を大切にすると云ふ事の精神を推し究めてみたならば所詮人類全体の進歩を計るといふことになる。此の故に我が力の使ひ方は唯一身一家を進めて行くといふばかりでなく、第一には報恩の爲第二には互立て合ひ助け合ひの爲に、餘力を作りて之を貢献せねばならぬ。斯かる餘力を作りて之を喜捨するを寄進といふ。日の寄進とは如何なる日にも必ず必ず勞力でなり金錢でなり餘力を作りて、報恩の爲又は公共の爲に盡すをいふのである。眞實進歩を計るといふ精神ならば、是非此の日の寄進といふ所まで實行が行届くやうにならねばならぬ。

人々其の分限器量によりて多い少いの異はあるにしても、兎も角其の日其の日に餘力といふものを働き出すでなければ、決して御教の信心が出來て居るのではない。併し日の寄進といふても毎日直樣喜捨せねばならぬといふのではない、唯此の精神で日々餘力を積み一旦事あるときに之を喜捨するといふので結構である。萬人が萬人一日の中縱令一時間たりとも乃至半時間たりとも、此の日の寄進をしたならば塵も積れば山となるの類にて後日大なる進歩を生みだす種子となることは言ふ迄もない。御神樂歌に夫婦そろうて日の寄進是が第一物種やと仰せられたる御意はよくよく心にとめねばならぬことである。

以上は、勤め一條の概略であるが、御教には尙一つ救け一條といふことがある、次に之を述べやう。

第一章第三節に說きたる如く、教祖は萬たすけの神として現はれ給ひたるのである。此の神の現はれ給ふことがなかつたならば、我々は未だ長く埃り心に迷ひて居なければならぬのに、此の神の御救けによりて今日の結構をみることが出來たのである。してみたならば此の神の御恩の深きことは實に記す言葉もない。かゝる御恩を受けながら我々は如何にして此の御恩報じをしたらばよいか。此の神の御受持は萬の救けであるから、我々不行届ながらも此の御救けの御取次をさせて頂くといふ事が、特に此の神に對しての御恩報じと言はねば

ならぬ。此の御恩報じの心から、未だ信心に入らぬものに信心の手誘をして御救けを頂かす樣にするのが、即ち御救け一條である。故に勤め一條とは我が信心の上でいふ事、御救け一條とは他人に同じ信心を頂かせる事になるので、信心には少しも異りないのである。抑人は孤り立といふことほど淋しいものはない、併し多くは皆孤り立の姿である。知己朋友といふも利の爲に集まりたる儕輩であつて、互に心を許すことは出來ぬ。親子夫婦といふが如き間柄にすら油斷をせぬ場合がある。誠にたのみ甲斐なき世の有樣ではないか。誰しも苦樂を共にし生死をも一にするといふが如き濃き間柄は望ましきことに思ふであらうが、之は決して利といふことを目的に

して出來ることでない、又威力といふものにて強ひつけてみたからとて到底仕遂げられることでない、唯々同じ信心の者の間には思はず知らずに出來るやうになる。是は唯教の上だけの事でない、事實我々は世界幷の人よりも同じ御道の人を戀しく思ひ、又教會に登參した時には心の中言ふに言はれぬ寛みを覺ぢ、何となく爽かな氣になつて、何事にもお互の手が自然に出るのを考へたならば明かであらう。教祖が人を救けて我が身救かると仰せ下されたるも全く此の爲である。救くる人、救けられる人、共に同じ信心に入りてこそ、始めて何の隔もなきやうになつて、今迄は孤り立の淋しい心であつたものも、何となく強みを覺ゆるやうになる。してみ

「たならば、一日も早く、世界一れつ兄弟に此の尊きお教けを頂かせて、共々同じ信心の上に、此の世を結構に通さして頂くやうにしたいのである。況して之が教祖九十年間萬たすけの御心勞に對する報恩の道であることを思うたならば眞實疏かに出來ぬことではないか。

天理教教義 終

明治四十年五月二日印刷
明治四十年五月五日發行
（非賣品）

發行者　東京市神田區駿河臺南甲賀町八番地　石井清

印刷者　凸版印刷合資會社代表者　河合辰太郎

印刷所　東京市下谷區二長町一番地　凸版印刷合資會社

不許複製

257
3

特18
951

天理教教義

国立国会図書館

014431-000-0

特18-951

天理教教義

石井 清／刊

M40
ABB-0809